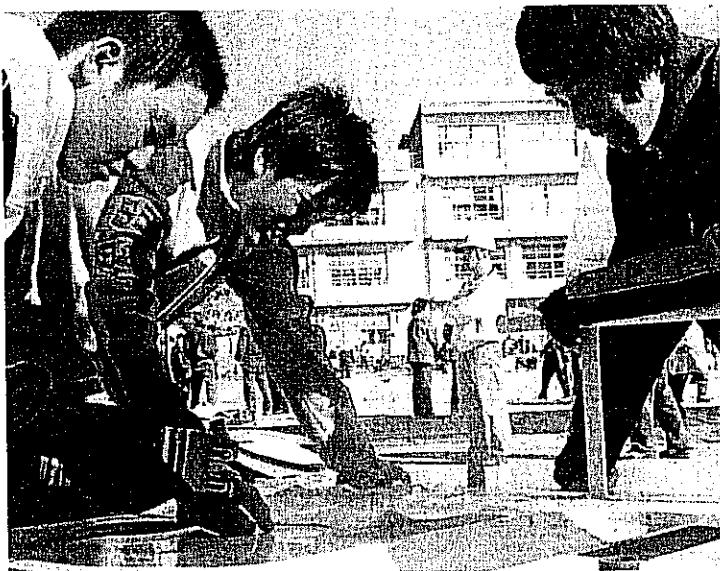


# 讀賣新聞

2008年(平成20年) 1月16日 水曜日



図面を見ながら仮設トイレを組み立てる高  
校生（静岡市駿河区の長田西小学校で）

## 大学・消防・自衛隊も支援

### 各地で訓練 キーワードは「鍛える」

東海・東南海・南海地震など巨大地震で大被害が懸念されている地域では、「鍛える」が防災教育キーワードになりつつある。

今世紀の半ばにも発生する恐れる東南海・南海地震で、大被害が懸念されている和歌山県。2004年から毎年夏休みに「高校生防災スクール」を開いているが、その開催のきっかけは、地域の高齢化だったという。昨年3月末現在で県内の65歳以上の割合は24.6%と、全国平均(20.8%)を上回り、近畿圏でも最も高い。リーダーを見て、地域の先頭に立つてもいいのが「スクール」の最大の狙いだ。

和歌山大や消防、自衛隊な  
だ。

ども積極的に支援、炊き出しや救急対応訓練などに加え、避難所運営訓練にも取り組む。昨年からは各校に人数を割り振るのをやめ、「やる気のある生徒」を募った。参加者は前年の約1300人から約700人に減ったが、訓練の密度は格段に濃くなつた。

「まずは机の下に隠れるんじゃないの?」「いや、30秒あるなら校庭に逃げられる」。恐れる愛知県立刈谷東高校で、昨年12月25日に開かれた県教委主催の「地震防災フォーラム」に参加した高校生たちは「生き残るために何を行動すべきか」をテーマに意見を交わせた。

想定は、紀伊半島沖で巨大地震が発生、「震度6強の揺れまで30秒の緊急地震速報が流れだ」。参加者は、グループごとに考えた対応方針を発表するのだ。

その発表を土台で支えるのは、02年の防災教育基本方針で中高生を防災の「戦力」と位置づけ、訓練への参加を促してきました。古屋大で講義を受け、阪神大震災の教訓を伝える「人と防災未来センター」（神戸市）で学ぶ。セミナーで学び、フォーラムで力を試す——段構えで防災力を磨きをかける。

静岡市駿河区の長田西小学校で、昨年12月2日の日曜日に行われた自主防災組織の訓練の参加者は約850人。うち約400人は地元の中高生だった。

12月第一日曜日は、1944年12月7日に起きた昭和の東南海地震にならぬ県独自の「地域防災の日」。県内全域で訓練が行われるが、県教委